
レイハ - Magician Of Whirlwind -

怜宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイハ・Magician Of Whirlwind

【Nコード】

N7489J

【作者名】

怜宇

【あらすじ】

大陸の南方に位置する美しく豊かな国、スヴィーリア。そこで500年間死んだ母が犯した大罪を浄化し続ける魔術師。人々は彼をこう呼ぶ。『舞風の魔術師』と。彼の母が犯した罪とは。国の英雄と瓜二つの国王、内に様々な感情を秘めた若き親衛隊員・魔術師たち、歴史に名を残す大魔女。今、彼らを取り巻く物語の始まりを告げる風が吹く……

第1陣：舞風の魔術師

「オレは処刑されるのですか」

青い光が照らす六角形の部屋の中央に黒髪の少年がひざまずき、その前に赤い髪の男が立っていた。男はグレーの瞳を少年に向け、静かに言った。

「確かにおまえの母は極めて重い罪を犯した。そして罪を償うべき母はもういない。しかしおまえが死ぬ必要はないだろう」

少年は顔を上げ、まるで闇の中のような髪の間から、それと同じくらいに黒い瞳で男を見つめた。少年の顔は傷だらけではあったが、成長して数年後にはかなりの美男になるだろうことが想像された。

「でも議会は陛下にオレの処刑を要求した。オレを生かしておくのは危険だと……」

「それは事実だ。だが私は彼らを説き伏せた。おまえには類い稀な魔術の才がある。これからはコンスタンスを師として修業に励むのだ」

少年は驚きに目を大きく見開く。

「あの大魔女のもとですか！？　しかし陛下、陛下がオレを殺す気がないのであれば、代わりに何らかの処分をなさらなくてはならない。そうでなければ議会だって黙っていません」

男は重々しく頷いた。

「もちろんだ。おまえは死んだ大罪人の唯一の肉親。おまえが代わりに償うしかない。だがその前におまえには一人前の魔術師になつてもらいたい。おまえが母の罪を浄化するのはそれからだ」

少年は男の言葉を受け止めた。

「ルシード国王陛下、陛下には感謝してもしきれません。オレが立派な魔術師になった時には……」

ルシード国王は言った。

「おまえは生涯このスヴィーリアに仕えよ。そして害なす者たちか

ら護れ。この美しい国を」

少年は深々と頭を下げた。ルシード国王は部屋の入り口に向かって歩きだし、部屋から出ていく間際、少年を振り返った。

「どうか、私の死後も頼むぞ、レイハ。『舞風の魔術師』よ」

レイハ、Magician Of Whirlwind

その国は世界の7つの大陸の中で最大の大きさを誇る大陸の南方に位置する大国であった。

国の名はスヴィーリアといい、気候は温暖で穏やか。海に面していて、他の大陸との貿易も盛んである。とても豊かで多民族や宗教にも寛容、軍事力でも群を抜く強国である。大陸最北に位置しその名を世界に轟かす大国ベレナード王国とは何度も戦争を繰り返してきた。

街を行き交う人々は皆、忙しそうに小走りで移動していた。明日は現国王が即位してちょうど2年になる特別な日なのだ。即位祭と呼ばれる祭りまで行われる。皆その準備をしているのだ。

2年前、スヴィーリア国民を大きな悲しみが襲った。国民から愛されたジュード前国王の崩御。

ジュードが王位につくまで、長い間スヴィーリアでは墮落した政治が行われていた。賄賂が横行し、官僚は私腹を肥やすばかり。王は酒と女に溺れた。王国各地では民衆による反乱が相次ぎ、国土は荒廃した。そんな状況を変えたのがジュード王だった。

王は常にスヴィーリアのことを考えていた。誰よりもスヴィーリアを、民を愛した。

彼は役職の人材を一新し、腐った政治を断ち切った。庶民たちの街にも王自らしょっちゅう出向き、国民たちを理解しようと必死だった。国民は彼を熱狂的に支持し、未来への展望を見出した。

しかし2年前、ジュード王は持病の悪化によりこの世を去った。

国民の誰もが悲しんだ。彼の葬儀には国中から人々が王家の城がある首都スヴィンまでやってきた。

エステル現皇太后もこの頃から病気がちになり、国民たちも動揺した。

ジュード王には子供が2人あった。王位は息子であるアルヴァ王子が継ぐこととなった。王子は当時18歳。国民たちは最初は心配していたが、それは無用だった。

若き王は父の意志を継ぎ、国民たちを自分の家族として守ろうと奮闘した。聡明で真面目な彼は周囲の者たちの意見は積極的に取り入れ、また彼の父がそうしたように頻繁に街へも赴いた。

彼が民衆の心を掴んだ理由は、その積極性だけではなかった。彼は約500年前、国を存亡の危機から救った英雄、ルシード王と瓜二つだったのだ。彼の燃えるような赤い髪とグレーの瞳を見て、アルヴァ王は天が遣わした偉大なる英雄の生まれ変わりに違いないと、国民たちは噂した。

アルヴァ王は父を超える支持を集め、即位してから2年を迎えようとしていた。

「んー、何度やっても解けないよー！」

美しい金髪を一本に結った幼い女の子がガラスの机に顔を伏せた。彼女の名はソフィーユ、年の離れたアルヴァの妹だ。顔の下には鉛筆でぐじゃぐじゃに数字が書かれたノートがある。

「そんなことはごさいませんよ、オレが解き方をお教えます」

傍らに立つ痩身の男が言うと、ソフィーユ姫は嬉しそうに体を起こした。爽やかな緑のスーツに身を包んだ男はまるで闇の中のように黒い髪と瞳を持ち、眉目秀麗という言葉がよく似合う。男が問題の解き方を教えると、ソフィーユ姫は満面の笑みでノートに数字を書く。

「ありがとう。やっと勉強が終わった」

姫は疲れた様子でノートの上に顔を伏せた。

「そんなことしてると、今に真つ黒ドブスになるぞ」

姫の後ろから、羽飾りのついた帽子をかぶったオレンジの髪の少年が脅かした。口からわずかにのぞく八重歯が意地悪そうに光る。

「シャックス、そんなこと言っちゃダメでしょ。ごめんね、シャックスはホントに口が悪いんだ」

白馬に乗った王子様という言葉を具現化したような（馬は連れていないが）金髪の美少年がシャックスをいさめ、姫を気遣った。

「んだとセーレ！ やたらと人間その他に優しくしゃがって。おまえそれで本当に悪魔か。そんだから馬鹿にされんだよ」

シャックスが声を荒げる。

「おまえはいつもうるさい。静かにしろ」

黒髪の男が言うと、シャックスは今度は男に怒鳴った。

「てめえのおかげでオレたちは魔界を離れてタダ働き！ 魔術師つてのは本当に嫌な連中だ。無駄に長生きしやがって、てめえだつて魔力がなけりや既にジジイを通り越して干からびてくるくせによ」

「シャックス、言葉に気をつける」

男に睨まれ、シャックスは口を閉ざす。

「ねえ、レイハはどのぐらい生きてるの」
ソフィーユが男に尋ねた。

「魔術師としてはちょうど500年、一人前になるまでを含めて517、8年ほどにございます」

レイハがそう答えるとシャックスが不満そうに言った。

「500年！ この500年の間にどれだけ酷使されたことか！ てめえは魔力を蓄え寿命を伸ばし、こっちの寿命は縮みまくり。とんだ疫病神が！ さつさと死んじまえ」

レイハはニヤリと笑った。

「オレは往生際が相当悪いらしくてな、死にかけるような目に遭つても何故かいつも生き残るんだ。まだ死ぬつもりもない。というわけで四の五の言わず働け」

シャックスが思い切り悪態をついたがレイハは無視してソフィー

この部屋を出る。姫の相手はセーレがしてくれるだろう。城の廊下を歩いていると書類を抱えた女性2人とすれ違った。女性たちはレイハを見るなり互いをこづきあった。

「まあ、レイハ様よ。なんて美しい」

「『舞風の魔術師』かあ。私にも魔法をかけてほしいわあ……」

『舞風の魔術師』というのはレイハにつけられたあだ名だ。彼は稀に見る天才の魔術師であり、特に風の魔術に秀でるためについたものだ。国家の魔術師の軍の入隊試験も筆記・実技共にトップで合格を果たしている。また非常に博識で王子だった頃の現アルヴァ王や、ソフィーユ姫のチューターもこなし、そして拔群の容姿ともなれば周囲の気を引かないわけがない。

彼はどこに行くともなく歩いていたが、城内の伝令役である赤いスカーフを首に巻いたカラスが1羽やってきて彼の頭上をぐるぐる回った。

「国王陛下が大広間二テオ待チデス」

「わかった」

直後彼の周囲を風が取り巻き、風と共に彼の姿は消えた。

アルヴァ王は大広間の奥の玉座に座って頬杖をついていた。数人の家臣たちが側に控えている。突如大広間を強風が駆け抜け、王の数メートル手前にもつむじ風が発生しそこからレイハが現れた。

「お呼びでございますか」

レイハがひざまずくと王は乱れた髪を撫で付けながら恨みがましく言った。王の頭は鶏のとさかよろしくめちやめちやに逆立っていた。

「普通に来いと言ったはずだが。何故いちいち風を吹かせる必要がある」

レイハはひざまずいたまま、悪びれる様子もない。

「これは失礼致しました。それにしても陛下、素晴らしい髪型です。どのようにセットされたのか非常に興味が……」

「おまえがやったんだろうが！」

後ろでは家臣たちがクスクス笑っている。王は顔をしかめた。

「おれの髪のことなどどうでもいい。悪いが2人にさせてくれないか」

笑いを堪えるのに夢中の家臣たちをきつく睨んで、大広間から出ていかせた。一生懸命髪を直すアルヴァ王にレイハは質問した。

「それほど秘密になさりたい話でもないでしょう。彼らを出さなくてもよろしいのでは？」

王は髪を直しながらため息をついた。

「これならおまえも普通に話せるだろう。おまえに敬語を使われると馬鹿にされている気がしてならない。普段通りに話せ。そのわざとらしくひざまずくのもやめろ」

レイハは立ち上がって面白そうにアルヴァを眺めた。

「そんな気はないんだがなあ。おまえとは長い。敬語で話すと時々違和感を感じるのは確かだが」

レイハに対しアルヴァは懐疑的だった。

「そうか？ おまえにとって20年なんて大した時間ではないだろう。ましてや2年など……明日の即位祭のことだが」

「承知している。城周辺の警固は任せる。明日は大勢の国民が集まるだろうからな。師匠もいらすようだし」

レイハが言うところアルヴァは少し青ざめて頭を抱えた。

「ルシード国王と並ぶ英雄であり、『舞風の魔術師』を育て上げたコンスタンス殿もおみえになるのか。緊張する」

「去年もいらしただろう。即位祭など昔はなかった。それだけおまえは人気があるということだ。自信を持って」

風が吹き、レイハの姿は消えていた。1人残された王は、全然もとに戻らない髪から手を離れた。

「これで自信を持てたと。全く……」

城の庭園では長身の少年が1人で剣術の修練をするのを別の少年

が座り込んで眺めていた。

「いよいよ明日だね。即位祭」

地べたに座り込んでいる黒髪に青目の少年が言つと、もう1人の方は剣を腰にさして額の汗を拭つた。こちらは茶髪に琥珀色の瞳だ。「ああ。オレたち親衛隊は浮かれちゃいけない。祭りが台無しになるようなことがあつちやたまらないからな」

親衛隊は王直属の精鋭部隊だ。

「わかつてる」

黒髪の少年は懷から黒塗りの拳銃を取り出した。
「使うことにならなきゃいいんだけど」

レイハが城の東の塔の上に佇んでいると、空を悠々と飛ぶ大きな獣の姿が見えた。毛色はよく晴れた空そのもので、背中から白い翼を生やす大きな猫だ。猫は一度旋回して彼の横に降りた。

「よい天気ですね。明日も晴れるでしょう。民たちも張り切っているようですし、いい即位祭になりそうです」

猫は翼を畳みレイハを見上げた。

「アルヴァ王もすっかり王としての風格が出てきましたね。幼い頃から似ているとは思いましたが、本当にルシード王そっくりです。まさに生き写し。姿だけでなく雰囲気までも」

レイハはおもむろに猫に尋ねた。

「なあルイン、ルシード王が仰つた言葉を覚えているか？」

ルインは不思議そうに頷いた。

「ええ。わたくしはあの場におりませんでしたけど、我が主人が教えて下さいました」

どうか、私の死後も頼むぞ、レイハ。『舞風の魔術師』よ

「王は何故まだ半人前だったオレをああ呼んだんだろうな」

レイハは考える度おかしく感じていた。

「さあ。我が主人がわからないことです。この愚かな使い魔には見

「当もつきません」

ルインも首を傾げる。

「確かなのは500年後の世、人々はかの英雄が贈った名で我が主人を呼ぶ……」

『舞風の魔術師』

第2陣：即位祭

いよいよ即位祭の朝がやってきた。城の中ではアルヴァ、ソフィーユ、エステル皇太后が側仕えの者たちに用意された鮮やかな装束に袖を通した。

レイハは使い魔のルインと共に城周辺の通りを巡回していた。万全な警備体制がしかれている。

スヴィンは既に人々で溢れていた。至るところで花火が上がり、花吹雪が舞う。

「今からこの盛り上がり。去年の比ではないですね」

ルインがしみじみと言う。彼らが通りに目を光らせながら歩いていると、建物の陰から話し声が聞こえてきた。

「おまえ、ここで食うのかよ」

「誰も見てないいいでしょ。腹が減っては戦が出来ぬって言うし」
声のする方に歩いていくと、少年が2人立っていた。片方は腰に長い剣をさした茶色の長髪。もう片方は黒髪に無邪気な青い瞳。肩から下げたバッグから箱を取り出している。

「ラッセにイクセルか」

レイハが声をかけると2人は振り返った。茶髪の方がラッセ、黒髪の方がイクセルだ。どちらも親衛隊員でレイハとも親しい。

「あつレイハ。そっちも見回り？」

イクセルは箱から皿を1枚取った。その上にはフォークとチョコレートケーキが乗っている。

「ああ。それが朝食か」

イクセルはまたバッグをまさぐっている。

「そう。時間なくて。あつた！」

イクセルは満足げに小瓶を取り出した。

「おまえ、それまさか……」

ラッセが顔を引きつらせた。イクセルがケーキの上に瓶の中身を

ぶちまけると、皿の上は真っ黄色になり、ケーキが見えなくなってしまった。

「チョコレートケーキのマスタードあえ！ いただきまーす」

イクセルは美味しそうに食べる。彼は優秀でただ1人の学生の親衛隊員だが、専ら破滅的な味覚センスと甚だしい偏食、いや『変食』で有名だった。

「あ、良かったら一口どうぞ？」

「誰が食うかそんなもん」

ラッセは呆れている。正常な味覚の持ち主なら、まず口にしない。「それ食い終わったらすぐ見回り再開するぞ。もう始まったみたいだ」

ラッセが耳を澄ましてみると身振りで示す。楽器の音や人々の歌う声が聞こえてきた。レイハたちが大通りに出ると、様々な楽器を持った城の音楽隊の者たちが、時に自分たちも踊りはねながら自慢の腕前を披露する。踊り子たちも曲に合わせて体を揺らしてリズムを刻み、行進する。祭りの始まりだ。パレードはスヴィンのメインストリートを通って城の前に向かう。

「祭りの目玉が始まるまでには城に戻るんだ。とつとと行くぞ」

イクセルは急いでケーキをかきこんで、皿を箱に、箱をバッグにしまった。

「そうだった。レイハも出るんだよね」

即位祭の目玉と言うべきもの、それは民衆たちはもちろんのこと、音楽隊、騎士団、親衛隊、魔術師たちがそれぞれ王を祝福する一種のショーのようなものだ。中でも魔術師たちはその完成度の高さから注目が集まっている。

「ああ、そ……」

「いたーっ！」

甲高い声があがった。流れるような金髪の少女がこちらに駆け寄ってくる。

「フローラ」

彼女は頭に羽の髪飾り、耳には花のイヤリング、胸元にはペンダントといかにも十代の女の子らしい装いだ。横幅の広い袖から山のような花の束を取り出す。

「はい、レイハ。使うんでしょ」

「ああ、助かった」

レイハはフローラから花を受け取った。彼が持つとなかなか様になる。

「何に使うの？」

そう尋ねてきたイクセルに、レイハは肩をすくめた。

「さあ、それはお楽しみとしか今は言うことができないな」

レイハはルインの口に花束をくわえさせた。

「広場まで運んでおいてくれるか」

ルインは頷いてすぐさま飛び立った。

「これからも『リリー』をひいきにね」

フローラがいたずらっぽくウィンクした。普段は花屋で働く彼女も立派な親衛隊員だ。レイハとも顔馴染みである。

「じゃ、私は他に用があるからもう行くわね。あなたたちもこんなところでつつたてないで、ちゃんと見回りしなさいよ」

フローラは跳ぶように駆けていった。

「ああそうか。フローラはやることがあるんだったな」

ラッセが思い出したように言った。

「何を？」

今度はイクセルがレイハに、シートと唇の前に指を立てた。

「さあ、それはお楽しみとしか言うことができないよ。ボクたちも行こうか。サボってると思われちゃう」

「原因はおまえだけだな」

ラッセがすかさず突っ込みを入れた。

一通り巡回を終えると、レイハはラッセたちと別れ、中央に噴水のある広場に来た。スタイル抜群、茶髪にロングヘアの女性が彼を

待っていた。

「シャーリー姉さん、ルインはどこに」

「所定の場所の警備につかせたわよ。これも受け取ったわ」

シャーリーが花束をレイハに見せた。

「城の周囲にシャックスとセーレをつかせました。何かあればすぐ知らせるように言っております」

シャーリーは満足そうに頷いた。

レイハの背後から顔も背丈もまるつきり同じ青年2人組がやってきた。どちらもややオレンジに近い赤毛に緑の瞳。服も似たものを着用しているが、一方は右の耳に白いイヤリング、もう一方は左耳に黒いイヤリングをしている。

「さあ姉さんに問題、どっちがロイドでどっちがジェイドでしょーか」

「どっちでもいいわ」

「いいから、ねえ……」

シャーリーはうんざりしている。

「ホントめんどくさい双子！ 会う度これなんだもの」

「正解は、オレがロイドでした！。次回こそ頑張つて」

右耳に白いイヤリングがロイド、左耳に黒いイヤリングがジェイドだ。しかしわざと入れ替えている時もある。

3人ともレイハと同じくコンスタンスの弟子だ。弟子同士の血縁関係はないが、シャーリーがコンスタンスの一番弟子だったことから、姉さんと呼ばれている。

「あんたたち、今日がどんな日かわかってる？」

シャーリーはため息をつく。

「わかってるさ。なージェイド」

「そうともさ。ロイド」

いかにも軽そうな2人だが、実力は折り紙付きだ。2人合わせて『両翼の魔術師』と呼ばれている。

「いつもみたいな悪ふざけはなしよ」

「大丈夫だつて。いくらオレたちでも、陛下をトサカ頭にするような度胸ないし」

「それ見て『イカしてる』なんて言う勇氣ももちろんない」

双子は揃ってニヤニヤしながらレイハを見た。昨日の話は既にこの2人に伝わっていたらしい。

「そんなことよりあんなたち、本番大丈夫なんでしょうね？」

シャーリーが双子にきつい視線を投げた。双子は楽勝だと言わんばかりの表情だ。

「ああ、余裕余裕」

「オレたち、なんでも完璧にこなさないと死んじゃう病だからさ」

「ならいいけど。陛下の前で失敗はできないから」

ジェイドは手を横に振った。

「姉さんには世間体もあるしな。安心して。姉さんの面目を潰すようなことはしねえよ」

軍に身を置く魔術師たちはいくつかの隊に分かれて任にあたっているが、シャーリーは軍の第16隊隊長だ。レイハが彼女に対して敬語を用いるのは、彼がシャーリーの隊に属し、部下の立場にあるからである。なお、シャーリーは隊長と呼ばれるのを好まない為、レイハは第三者の前以外では姉さんで通している。

「そろそろ城に行きましょう。他の魔術師たちとも打ち合わせないと」
シャーリーがそう言うと、4人の姿は広場から消えた。

王家の城の前を大観衆が埋めつくしている。城のテラスにアルヴァ、エステル、ソフィーユが現れると大歓声が城を包んだ。アルヴァが一步前に出た。一変し、耳が痛くなるような沈黙。

「このような日を迎えられたことを、とても嬉しく思う」
アルヴァが観衆に語りかける。

「私は人間的にも王としてもまだまだ未熟だ。しかし私はこれからも皆を大事なスヴィーリアの民として、私の家族として守ることを誓おう」

観衆たちは王を讃える言葉を口々に叫ぶ。

「さて、祭りの最中に長話など聞きたくないだろう。何もかも忘れ、思い切り皆で宴を楽しもう」

先陣を切って音楽隊が列を整え、演奏を始めた。

「うーんよく見えない。ラッセ、肩車してくれない？」

「無理だ。それができたとして、周りにも迷惑だろうが」

ラッセとイクセルは息の詰まりそうな人ごみの中でもみくちやになつていた。背の高いラッセにはなんとか演奏する音楽隊の姿が見えた。

「やっぱり城お抱えの音楽隊とあって、レベルが高いね。素晴らし
いよ」

完全に人に埋もれたイクセルは目を閉じて音楽を楽しんだ。

音楽隊が全て演奏を終えた後、彼らは脇に退いて行進してくる騎士団に場を譲った。

騎士団が行進するのに合わせて音楽隊が演奏し、騎士団員の面々は綺麗に足並みを揃える。星形に列を描くと代表数名が見事な剣の試合をしてみせた。

騎士団の次は親衛隊の代表たちだ。皆女性だ。鮮やかな色の衣装に身を包んでいる。女性たちは軽やかな身のこなしで優雅なダンスを披露する。彼女たちは数人で体を組んで3つタワーを作った。中央のタワーの1番上で逆立ちしているのはフローラだ。真上に高くジャンプし、タワーの下に控える女性たちが上手くキャッチする。

「さすがフローラ。完璧」

彼女たちの演技はイクセルからも見えた。

「あいつらに任せてよかったな」

ラッセもこの一言だ。

演技はフローラの笑顔で締められ、その後に民衆たちが次々と個々のパフォーマンスを見せていった。

「次で最後だね」

ラッセもイクセルも、その場にいた誰もが静かに待った。

「大本命の登場だ」

何の前触れもなくそこかしこに虹のアーチが現れ、赤や青、黄色など鮮やかな色の光が駆け抜けた。ドレスを着た小さな妖精が星を降らせながら何人も飛び回る。一緒に魔術師の使い魔たちも空を飛び、火を吹いたりまばゆい光を放ったりする。かと思えば、白い霧が辺りを包んだ。

同時に光の柱が2本現れた。霧の中で柱は色を変えながらゆらめき、増えたり減ったりを繰り返す。

「そろそろだな」

観衆から姿が見えないよう注意しながら、レイハは頃合いを見計らいフロアから渡された花を宙に放り投げた。風が巻き起こり、空高くまで花を運んでいく。舞散る花弁を光が照らす。優しい風が観衆の頬を撫でた。長い髪の少女の姿をした美しい精霊が宙を舞っていた。華麗な風のダンスに皆が惹きつけられた。

精霊が一礼して消えると大きな火花が上がり、参加した魔術師や召喚された人外の者たち全員が吹き上がる炎と共に現れ礼をし、フイナーレを飾った。巻き起こる大歓声。拍手喝采。

大盛況の内に即位祭は幕を閉じた。それでも人々は夜中まで余韻に浸り、騒いでいた。

「まだあちこちで歌が聞こえる。ここまで盛り上がるとは思わなかったな」

城の塔で佇むレイハの隣にいるのは祭りで活躍した風の精霊だ。

「おまえはよくやった。ラッセやイクセルも褒めていたぞ」

精霊は頬を赤く染め、頷いた。

「師匠だって同じことを思ったはずだ。お会い出来なかったが……」

ちょうど同じ頃、スヴィンの街中を女性が歩いていた。妖精の女の子を1人伴っている。

「素晴らしいお祭りだった。たまには外に出てみるものね」

女性は微笑みを浮かべた。

「あの風の精霊はあの子が召喚したに違いない。ふふ、次のサバトには顔を出してみようかしら。私の弟子たちはしばらく見ない間にどれだけ成長したかしらね……」

女性は夜闇の中に消えていった。

第3陣：ア Ril 村の怪

「何だ、頼みたいことは」

レイハがアルヴァに呼び出されたのはある晴れた日の、ちょうど昼時であった。アルヴァは書類を見ながらレイハに説明した。

「スヴィーリアの西の果て、ベティス山のふもとにア Ril という小さな村がある。そこに行ってきたほしい。ラッセ、イクセル、フローラにも同行願いたい」

ベティス山とは隣国トレアンベルとの国境をまたぐ大きな山だ。

「人口は2000人程度。辺境の地ではあるがしばしば登山者も訪れる。しかしどうも、村に立ち寄った者が消息を絶つことが相次いでいるらしい。調査団を派遣したが、一向に帰ってくる気配がない。この件はおまえたちに委ねるべきだと判断した」

レイハはアルヴァから書類を受け取り、目を通した。

「承知した。ラッセたちにも伝えておく」

ラッセとイクセルは城の食堂で大皿を囲んで食事の最中だ。

「辛味がピリピリ効いててウマイ。城のコックもいい仕事してんな」
ラッセは大皿から自分の分を取り皿に取り分け、料理に舌鼓を打つ。

「味薄いなあ……」

一方でイクセルはラッセと同じ料理を食べて顔をしかめた。置いてあった香辛料の瓶を手取る。ラッセは青ざめた。

「ちよつ、バカやめろ！」

遅かった。イクセルが瓶をひっくり返し、大皿の上は真っ赤になっ

てしまった。

「うん！ これでラッセもおいしく食べられるね」

「オレとおまえの味覚を一緒にするな！ まだ食べたかったのに、これじゃもう食べねえじゃねえか！」

笑顔で料理を頼張るイクセルにラッセは怒鳴り散らした。いつぱいに入っていた激辛ソースの瓶は空になってしまっている。ぶっ飛んだ味覚のせいで陰で『変食王子』とあだ名されるイクセルは、困ったことに自分の舌が異常なことに気づかない。

「ったく……」

ラッセは早々に他の料理を自分の取り皿に分け、食べることに専念した。

「ここだったか」

レイハは食事中の彼らに近づいていった。

「よう。王から仕事の依頼か？」

レイハが肯定するとラッセとイクセルの目の色が変わった。

「ふーん、普通じゃないね。調査団すら帰ってこないなんて」

「怪しさ満点だな。きつと何かある」

イクセルがフローラに連絡を取り、任務の旨を伝えた。

翌日未明、4人はスヴィンを発った。

馬車や汽車を利用し、3日をかけようやくア rilルまであと少しというところまで至った。

「私任務でこんなに遠くまで来たの初めて！ ドキドキする！」

フローラが目を輝かせた。

「遠足じゃねえんだぞ。今のオレたちはただの一般庶民じゃねえ」

ラッセが言った。これは王からの親衛隊、そしてレイハへの正式な依頼があつての任務なのだ。

男女年齢問わず卓越した身体能力を持つ者が親衛隊員になれるわけだが、スヴィーリアの親衛隊員の多くは任務時以外一般人と全く変わらない生活をしている。

「なんか本当に辺境って感じだね」

雄大なベティス山が見える他は、殺風景でただ青い空がどこまでも広がっているだけだ。

「この辺は汽車も通らねえみたいだしな。登山者以外で来る奴なん

「かないだろ」

一行は村に向かってしばらく歩き続けた。

「あれ、誰か倒れてる」

村まで目と鼻の先というところで、少年が1人倒れているのを見つけた。服は所々裂け、ぼろぼろだ。

「酷いね。早く処置しなきゃ」

イクセルは少年に駆け寄ってバッグから薬草やガーゼを取り出した。

彼の生家はスヴィンで1番の薬屋だ。彼も薬の知識や調合の技術を持っている。

イクセルが少年の傷口の消毒をしている時、少年が意識を取り戻した。

「う……」

少年は起き上がった。レイハたちの顔を順番に眺める。

「ダメよ。まだケガが……」

「おまえたち、ア ril に向かってるのか」

フローラを遮って少年が尋ねた。

「ああ、そうだ」

ラッセが答えると少年は興奮した様子で叫んだ。

「ダメだ！ 絶対にあそこに行っちゃいけない！」

「ほら、落ち着いて」

イクセルがなだめるが、ケガの処置をする彼の手を払いのけ、少年は訴え続けた。

「行っちゃダメだ！ おまえたちみんな死ぬぞ！」

4人の間に緊張が走った。

「忠告はありがたいが、こちらには仕事がある」

レイハが言くと少年は噛みつかんばかりに口を開けた。

「行くなと言って……」

「オレたちは何度も死線を潜ってきた。生半可な覚悟なんかしてねえ。おまえが心配することじゃねえさ」

ラッセが言い聞かせると少年は黙り込んだ。その隙にイクセルが素早く薬を少年の体に塗る。

「はい、終わったよ。これもあげるから、安静にね」

イクセルが少年に薬を手渡した。

「ねえ、あなたはどうしてケガをしてるの。ア ril 村に行くなんて、何か知ってるの？」

フローラが尋ねたが、少年は何も言わずに村とは反対方向に走り去った。

「どういうこと？ 村に行くなんて」

フローラは首を傾げ、ラッセは目を細めた。

「村に何が潜んでるかは知らねえが、危険なものに間違いはなさそうだ」

4人が村に入った時、まだ昼間だというのに、辺りはしんと静まっており、猫の子一匹いない。

「人口の少ない村だとは聞いてたけど……」

村の中心部に向かってずんずん歩くが誰にも出会わない。

「人が少ないだけよね？ 村の人たちが事件に巻き込まれたとかじゃないわよね？」

フローラが不安そうにキョロキョロする。

「前者じゃないかなあ。心なしか空が暗くなってきたような……」

答えるイクセルにも元気はない。

唐突に、彼らの耳に鐘の音が響いた。

「なんだ？」

「皆歓迎しろ！ お客だ！」

誰かが声高に言うのが聞こえた。次の瞬間四方から足音が鳴り響き、あつという間に4人は村人に囲まれてしまった。

「集会所にお連れしろ。村長もお呼びするんじゃ」

「今宵は宴じゃ！」

「えっえっ、なに？」

「どうなつてんだ？」

4人がわけもわからないまま、村人たちは大人数で彼らを押し流した。

「いやあ、申し訳ない。何の話もなしにいきなり連れてこられて、さぞ混乱されたことでしょうな」

4人は村の集会所の家屋に招かれた。村長はとても人柄の良さそうなお初の人物だった。

レイハが頭を下げた。

「いえ、皆さんが我々旅の者を歓迎して下さいるのはありがたいです。わからないところだらけですが」

彼らは旅の途中を装うことに決めていた。村長は笑って手を振った。

「どうか村の衆を許して下さい。皆よそから人が来て大変喜んでります。辺境の地にあるせいで、村の外のことには皆うとい。国の行事がある時以外外にも出ませんからな。皆外に憧れがあつて外からの客人を嬉しいがります」

「そうだったんですか」

村長は優しい表情だ。

「せっかくですのでゆっくりして行って下さい。何も無いところで恐縮ですが」

村長の言う通り、村人たちは皆客人が訪れたことを大変喜んでいる様子だった。4人が集会所の家屋から戻ると大勢の村人たちが彼らを待っていた。

戸惑うラッセと肩を組んで歌う男たち。

フローラは村の老人たちから褒めそやされた。

「べっぴんさんじゃなあ」

「そんなことないですよー」

「うちのばあさんもこれぐらいきれいじゃったらのー」

老人たちは大声で笑った。

イクセルは村の女性たちと話している。弟にしたいくなるような雰囲気、彼が持つているからだろう。

レイハはと言うと、ただ1人で周囲を眺めるだけだった。村人は常に彼から5メートル以上の距離をとったし、目も合わせようとしていないのだ。

「あの、あんたの服、珍しい模様が入ってるな。そりゃなんだ」

十分な距離を保ったまま出し抜けに村人の1人がレイハに尋ねた。ア rilル村で村長以外の人物と話すのは初めてだ。

「オレは魔術師でして、身につけたり持ち歩いたりするものに呪文をよく記しておくんです。これは呪いよけで、ある程度の呪いならこれで防げます。弱い魔物を追い払う効果もあります」

レイハの服には白い字で呪文が数カ所入っている。質問した男は聞くだけ聞いてレイハから顔を背けてしまったが、好奇心旺盛な子供たちがレイハのもとに集まった。

「お客の兄ちゃん魔術師なの？」

「魔法で何かやってみせて！」

子供たちにせがまれ、レイハが指を鳴らすと、指から火花が飛び散った。火花は子供たちの周りを時々色を鮮やかに変えながら兎のように跳ね回る。

「わー、すごい」

子供たちは大喜びだ。

「ねえねえ、魔術師さんって皆使い魔を必ず持つてるんでしょ。兄ちゃんの使い魔ってどんなの？」

「見たい見たい！」

子供たちはさらに興味を示したようだ。レイハは意地悪く言った。「見せてもいいが、身の毛もよだつような、怖い使い魔だったらどうする？」

「大丈夫だもん！」

「絶対泣かないもん！」

子供たちはちょっと不安そうだったが、好奇心が勝ったようだ。

「それなら、来いルイン」

ルインが子供たちの頭上に現れた。しかし子供たちがあげた歓声は、大人たちの悲鳴にかき消された。

「うわあああ！」

「バケモノだああ！」

ルインの姿を見た村の大人たちが絶叫しながらくもの子を散らすように逃げ出した。

「羽の生えた猫さんだ。かわいい！」

「何言ってるの！ 早く逃げるのよ！」

全く怖がる様子のない子供たちを、その親が半狂乱になって連れて逃げる。ついにはその場にいた村人たち全員が逃げ帰ってしまった。

「あの……わたくしそんなに怖いですか？」

ルインが傷ついた様子で言った。

「いや。怖がったのが子供ならまだわかる。いい年の大人が……」

ルインを一般人に見せてこれほど怖がられたことはなかった。

「子供たちは喜んでたぐらいなのに。ルインちゃんは何もしてないのよ。かわいそう」

フローラがルインを撫でて慰めた。

「あれは少々異常だな。即位祭るときや、魔術師がルインみたいな使い魔をいっぱい飛ばしてたんだぞ。それだけじゃねえ。レイハ、おまえも村人から避けられてただろ」

ラッセが目を細めた。レイハは頷いた。

「それは感じた。オレに近づいてきたのは子供だけだ」

イクセルも考え込む。

「この村の大人たちは魔法的なものが嫌いなのかな。いずれにしろ、調べがいが出てきたね」

「村長、宴会の準備は順調に進んでいます」

「よいよい。準備が整い次第、客人を宴会場に案内せよ」

村長の自宅には村人数人が集まっていた。

「しかし問題が1つ。客の中に魔術師がまざっとります。いつも通りに事が運びますかどうか……」

村人の1人が心配そうな面持ちで言った。村長は笑った。

「魔術師？ ちょうどよいではないか。このごろは骨のない客ばかりで退屈しておったばかりよ。魔術師ならよい養分になるかもしれないなあ……」

村長は瞳に邪惡な光を宿し、別人かと思うほどに顔が歪んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7489j/>

レイハ - Magician Of Whirlwind -

2010年10月21日22時15分発行